

フォーサム2018東京

ランチョンセミナー4

ベーチェット病のトータルマネジメント

日時

2018年7月14日(土)12:00~13:00

会場

第5会場 (京王プラザホテル 42階 高尾)
東京都新宿区西新宿2-2-1

座長

後藤 浩 先生 (東京医科大学 臨床医学系 眼科学分野 主任教授)

演者1

慶野 博 先生 (杏林大学 眼科学教室 准教授)

ベーチェット病ぶどう膜炎に対する
インフリキシマブのBest Use

演者2

岳野 光洋 先生 (日本医科大学 アレルギー膠原病内科学 准教授)
特殊病型の治療

本ランチョンセミナーは整理券制でございます。
配布時間：7月14日(土) 8:00~11:00
配布場所：京王プラザホテル 4階 花前 ホワイエ
※整理券はセミナー開始5分後に無効となります。

ベーチェット病のトータルマネジメント

座長

後藤 浩 先生 東京医科大学 臨床医学系 眼科学分野 主任教授

演者 1

ベーチェット病ぶどう膜炎に対する インフリキシマブのBest Use

慶野 博 先生

杏林大学 眼科学教室 准教授

1995年 東京医科大学 卒業
1999年 東京医科大学大学院 修了
2000年 東京医科大学眼科学教室 助手
2002年 米国ハーバード大学スケペンス眼研究所 研究員
2007年 杏林大学眼科学教室 講師
2011年 杏林大学眼科学教室 准教授

本邦においてベーチェット病による網膜ぶどう膜炎*に対して抗TNF- α 抗体インフリキシマブ(IFX)が適応を取得してから11年が経過し、その間にIFXの有効性、安全性についての多数のエビデンスが蓄積されてきました。IFXの位置づけも承認直後は失明を回避する最終的な手段として捉えられてきましたが、最近では眼発作によって視機能が障害される前に早期からIFXを使用することで良好な視力を維持できることが可能となってきました。本セミナーではIFXの有用性について過去の報告をレビューするとともに、実際の症例を提示しながらIFX導入の適切なタイミング、開始前スクリーニングのポイントについてお話ししたいと思います。

*効能効果:既存治療で効果不十分なベーチェット病による難治性ぶどう膜炎

演者 2

特殊病型の治療

岳野 光洋 先生

日本医科大学 アレルギー膠原病内科学
准教授

1985年 3月 鳥根医科大学(現・鳥根大学医学部)卒業
1986年 6月 倉敷中央病院内科医員
1991年 4月 聖マリアンナ医科大学 内科学・臨床検査医学助手
兼内科(膠原病、アレルギー)医員
1995年 6月 米国FDA/CBER留学
1996年10月 聖マリアンナ医科大学 免疫学・病害動物学 講師
2002年 4月 横浜市立大学医学部第一内科 講師
2005年 4月 横浜市立大学大学院医学研究科
病態免疫制御内科 准教授
2014年 4月 横浜市立大学附属病院 臨床検査部 部長(准教授)
2015年 4月 日本医科大学大学院医学研究科
アレルギー膠原病内科学分野 准教授

ベーチェット病は全身性の炎症性疾患であり、一部に患者では重篤な血管病変、神経病変、腸管病も生じうる。その診療においては各臓器病変の重症度の把握に基づく、治療戦略の組み立てが求められる。本講演では特殊病型の臨床像を概説し、レミケードの有用性を紹介するとともに、トータルマネジメントに向けた診療科連携の重要性についても述べたい。